

差別の心理機制

— 自己との関係を通して —

鈴木晋怜

1、問題の所在

「私」という人間はいくつもの貌をもっている。そして通常、それらを実に器用にまた自然に使い分けている。例えば私自身の例をもつて言えば、寺の住職としての自分、夫としての自分、父親としての自分、伝法院の연구원としての自分、さらには日本人としての自分、男としての自分等々、様々な貌があり、それらは場面場面によって選択され、その都度その都度、私として認識される。私はそうした幾つもの貌を巧みに使い分けながら、しかし、分解されることもなく、依然として私であり続けているのである。

さらに「私」の中には普段決して「私」として表に出てこないような貌もある。それは、先に挙げた「……」としての自分」が、いずれも私が属する社会・文化の中で、ある一定の承認された価値と役割を賦与されたものであるのに対し、決して社会や文化から承認されないような、あるいは承認されているとしても、「あるべきでないもの」として承認されているようなものである。その貌は、通常、「私」として意識的に認識されることはない。いつも排除され、

抑圧されている。しかし、時としてはそれは強烈にその存在をアピールすることがある。そしてその出現の仕方は、現実世界の中においてとは限らず、むしろ夢の中であったり、あるいは他者の中に投影されていたりするのである。「私」とは、そうした様々な貌で構成されている。それぞれの貌を時によって選択し、取入れ、あるいは排除し、さらには排除されたものを夢や他者の中に確認することによって、全体としてのバランスを保っているのである。逆に言えば、「私」という全体を保つていくためには、そうした選択、取入れ、排除という作業が必然的に要請されるのである。

これと同じことは、我々の属する社会・文化においても当てはめることができる。ある社会や文化が成立し、維持されていくためには、その構成員が承認し、取り入れている肯定的な秩序（システム）が必要とされ、それがもつ求心力によって社会・文化の中心が形成される。またそれと同時に、秩序（システム）をもつということは、その秩序（システム）の枠組みから逸脱したものを排除・抑圧し、周縁へ追いやるという構造を必然的に併せもつ。従って、社会・文化があるままとまりをもつたものとして維持されていくためには、その中心となる謂わば表の貌（それは一つとは限らないが）と周縁に追いやられている裏の貌とが必要であり、その両者をもつて一つの社会・文化が成立しているのである。その意味において、ある社会・文化を見る場合は決して光のあたった表の部分だけを見るのではなく、抑圧され、排除された影の部分をも射程にいれて、全体として把握していかなければならない。そうした影の部分もその社会・文化がもつもう一つの貌なのである。そして社会・文化それ自身も、「私」と同じように選択・取入れ・排除という作業を行なっていると考えることができるのである。

このように考えるならば、「私」が「私ではないもの」として、あるいは「我々」が「我々ではないもの」として排除しているものも、実は「私」「我々」の部分であり、それは決して「私」「我々」の外部にあるのではなく、「私」「我々」

の内部の問題として捉えることができるのではないだろうか。そしてさらにこれを差別という問題に関連づけて考えるならば、「私」あるいは「我々」は、他者を他者として差別しているのではなく、自己が自己を差別していると捉えることができるのではないかと思うのである。「私」あるいは「我々」があたかも自身ではないものとして差別しているものも、自己の投影ではないのか。その意味において、差別の問題とは、自己／他者、内部／外部という視点からではなく、自己の全体性という視点から捉え直すことができるのではないかと思うのである。

そこで本論文では、そうした差別の心理機制について、自己というものを中心に据えて論じてみたい。

2、被差別者の周縁性

我々は何故、個人的あるいは集団的に、さらには絶えることなく、差別する対象を創り続けるのであろうか。差別されるものとは、ア priori に存在するのではなく、私が、あるいは私たちが仕立てあげて初めて出現する。だとするならば、そこにはそうせざるを得ない必然性があるはずである。そしてその必然性とは、我々自身が被差別者を創り出している以上、我々の外部にあるはずはなく、あくまでも我々の内部に存在すると考えなければならない。また、そうであるからこそ、我々が存在する以上、差別される対象は永遠に生産されてしまうのである。

それでは、我々の内部に潜む差別への志向性とは何なのであろうか。何故、我々は差別してしまうのだろうか。その問いに答える前に、まず差別されているものについて作業仮設的に次のように定義してみたい。

被差別者とは、個人、あるいは集団によって一義的に負の価値及び役割を与えられ、その周縁に位置づけられた者をいう。

ここで「一義的に負の価値及び役割を与えられ、その周縁に位置づけられる」ということについて少しく論述しよう。

我々が被差別者を創り出す時、彼らをどのように自分の中にあるいは社会・文化の中に位置づけているのであろうか。言うまでもなく、彼らは自己あるいは社会・文化にとつての中心にはなり得ない。前述したように私の中心には肯定的な自己があり、社会・文化の中心にはその構成員によつて承認された秩序に従い得る者が位置づけられる。従つて、我々が創り出す被差別者は、自己あるいは社会・文化の周縁に置かれることになる。

しかし、自己あるいは社会・文化の周縁に置かれるという場合の周縁には、二つの意味がある。それは文字どおりの意味での「周縁性」ともう一つは「境界性」である。そしてこの二つの概念は、多くの場合、峻別されることなく、混同して使われているように思われる。

赤坂憲雄は、この周縁性と境界性の違いについて、次のように述べている。(赤坂憲雄著『異人論序説』筑摩書房一九一〜二九二頁)

周縁性とはある価値体系の内部における構造の揺らぎ(弛緩)であり、中心からの距離の遠さを重要な指標のひとつとする。この、中心/周縁という構図にとつて、構造上の外部はかならずしも必要とはされず、ときに捨象されるということは注意されてよい。周縁からたちのぼるカオスは、中心によつてすでに・つねに囲い込まれている。言葉をかえれば、外部から孤立した円環(価値体系)の内側では、周縁(とそのカオス)は中心に奉仕する補完項としてのみ許容されるのである。

(中略)

それになりたいし、境界とはある価値体系の内部／外部のあわいに横たわる『或る《空虚》』であり、そこからとぎれることなく湧出するカオスは、内部によつては制御しえぬ荒ぶる力にみちている。境界は内部（または中心）の補完項ではない。むしろ内部／外部の分割という不断の運動そのものである。

すなわち、周縁性とは、単一の価値体系内で中心から遠い距離に置かれ、また中心に囲い込まれながらそれを補充することであり、価値的一義性をもつものとして捉えることができる。例えば、男性中心社会においては、女性は常に周縁に置かれる。しかし、男性としてのアイデンティティを保つためには、女性が必要であり、男性中心社会という単一の価値体系の中に、反中心として価値的に一義性をもった女性を周縁に配置することによつて、その社会での男性のアイデンティティが保持されるのである。

それに対して、境界性とは、複数の価値体系の間にいる状態であり、一つの世界とそれとは異なる世界の狭間にあつて、一方の世界の中心に囲い込まれることなく、異世界への通路を開くものとして、ダイナミックなパワーに満ちているのである。それは、決して中心にはなり得ないけれども、その中心とは違つた価値をもっているという意味で、価値的両義性を備えたものとして捉えることができよう。

このように周縁性と境界性とは、全く違う意味を持つているにも拘らず、我々はしばしばそれらを混同し同じ文脈で考えてしまうのである。それは周縁性にしても境界性にしても、共に社会のマージンに位置づけられるという点で共通しているからかも知れない。しかし、筆者が前述した作業仮説の中で用いた「周縁」という言葉は、あくまでも周縁性という意味である。そこに境界性としての意味は含ませていない。差別という問題を考える場合、両者はやは

り峻別して考えなければならぬのである。なぜならば、我々が人を差別するとき、それは境界性においてではなく、周縁性における一義的な価値体系の中で、それを行なうからである。すなわち我々が創り出す被差別者とは、常に我々にとって負の価値しかもたないのであり、また負の価値しかもたせないからこそ、自分が安心して中心でいられるのである。

被差別者に境界人としての意味をもたせて考えるのは、ある意味で非常に危険である。なぜならば、それは差別を正当化することになり、その本質をぼかしてしまうからである。

3、自己差別としての他者差別

それぞれの場面で「……としてのアイデンティティ」を保つためには、すべて〈他者〉が必要である。例えば、親としてのアイデンティティを保つためには、子が必要であるし、夫としてのアイデンティティを保つためには、妻が必要である。すなわち他者との関係を通して自己というアイデンティティは現実化される。他者とは自己を補完するものとして存在するのであり、その意味において、他者とは自己の部分として捉えることができよう。

さらに自分はいくつあるべきだという自己、すなわち善なるものとして自己、あるいは正なるものとしての自己を保持していこうとするならば、必ず、悪としての他者、邪としての他者を置かなければならない。そして、善なるものとしての自己、正なるものとしての自己が自己の中心であるとすれば、悪としての他者、邪としての他者とは自己の周縁に置かれて自己を補完するものであると考えられる。自己の周縁にそうした否定的存在を置くことによって初めて自己の全体性が保たれるのである。

ところで、この自己の周縁に置かれた否定的存在としての他者とは、実は、意識によって抑圧されたへもう一人の

自己〕であり、自己の否定的アイデンティティを他者に投影したものと考えることができるのではないだろうか。例えば、「あいつはケチで金にきたない。金のためなら何でもする奴だ。」として、ある他者を非難するとき、実は、自分のお金に対する執着を他者に投影しているのではないか。あるいは黒人の性欲についての伝説、すなわち黒人は野獣のような強い性欲を生まれつきもっているというイメージには、白人が自己の属性として認めがたい否定的アイデンティティを黒人に投影したものと考えることができるのである。

この意識によって抑圧されたへもう一人の自己〕を、ユングは「影」という概念で説明している。（河合隼雄著『影の現象学』思索社二五頁より）

影はその主体が自分自身について認めることを否定しているが、それでも常に直接または間接に自分の上に押しつけられてくるすべてのこと——たとえば、性格の劣等な傾向やその他の両立し難い傾向——を人格化したものである。

すなわち影とは、それまで生きてこられなかった可能性としての自己であり、意識が選択している価値体系と相入れないため無意識の中に抑圧された否定的自己として捉えることができよう。

しかしこの無意識の中に抑圧された否定的自己は、そのまま無となったり、消失したりはしない。それはいつでも意識の領域へ姿を現そうと機会を窺っている。言葉を変えて言うならば、自己の中心をなす肯定的自己アイデンティティは、絶えず、無意識の中に押し込められたへもう一人の自己「影」の突き上げに晒されているのである。そして、そうした突き上げに対し、我々の意識はどのようにして防衛していくのか。それが、投影という心理機制であると思われるのである。すなわち、否定的なへもう一人の自己「影」をある特定の他者に投げかけ、一方的に負の役割、ある

いは負の価値を他者に仮託することによって、無意識の突き上げから、自己を守るのである。人が自己の所属する社会の中で、肯定的自己を保つて行くためには、それから逸脱した自己を抑圧しなければならない。しかし、その抑圧された自己は圧倒的エネルギーをもって肯定的自己の領域を脅かそうとする。抑圧された自己もまた自己に他ならないと主張するのである。が、だからといって、それを認める訳には行かない。そんなことをしたら、自分は社会の中で承認されて生きていくことができないからである。そこで、自己としては認めがたい否定的自己を他者に押し付け、あたかもそれは自己ではないかのように振舞い、他者をスケープゴートにすることによって、社会における自己の承認を保つていくのである。

我々は他者を差別する。確かに現象的には、自己の差別の対象は他者である。しかし、心理的には、自己が自己の影を対象として差別しているのである。我々は他者を差別していると思いつながら実は自己を差別しているのである。「総体としての自己」をそのまま生きられない自己が、社会的あるいは個人的に承認された「部分としての自己」を中心に据え、「抑圧された影としてのもう一人の自己」を周縁に追いやり、さらにはそれを他者に投影してあたかも自分ではないものとして差別することによって、自己を維持していく。換言すれば、自己があり続ける限り、自己の影も存在し、その投影として差別される他者もまた再生産され続けていくのである。

4、まとめにかえて―現代の視点から―

「人はみな生まれながらにして平等であり、従つて、人はみな平等に扱われるべきである」という命題は、現代社会においては、否定すべきもない真理として理解されているように思われる。この命題にあからさまに異を唱えることは現代社会のルールから逸脱することであり、このルールを守るとは我々が社会の中で生きて行くための資格条件

とさえ思われる。

しかし我々の社会の中には、様々な差別がある。出生による差別、住む地域による差別、肌の色による差別、能力や経済力による差別等々。こうした差別は、我々が理念としては誰もが差別に反対しているのにも拘らず、依然として存在し続けているのである。逆に言えば、我々が「人間皆平等」という理念を強く掲げれば掲げるほど、その理念と現実との乖離が増すのかもしれない。なぜならば、自らのアイデンティティとは、自分とは違った他者との関係を通して確立されるものであり、そしてその差異はしばしば単なる中立的な区別ではなく、ある価値付けを含んだ評価として認識されるからである。

確かに現代社会は、過去にあったような封建制における一元的身分秩序は消失し、人々の生活様式やライフスタイルの多様化が進んでいる。しかしそれは同時に社会における絶対的中心・絶対的周縁の喪失をも意味し、従って、現代に生きる我々は、中心にもなり得るが、同時に周縁にもなり得るという両義性を生きなければならなくなった。換言すれば、現代人は、誰もが差別される側にまわる可能性をもっているものであり、その不安の中に身を晒しているのである。そしてその不安から逃れるためには、そうした周縁に追いやられそうな自分をできるだけ抑圧し、自らのアイデンティティを中心の場に確保していかなければならないのであるが、前述したように否定的自己を抑圧すればするほど、それはエネルギーを蓄え、自己の存在をアピールする。そこで我々は、他者にその自己を仮託し、他者の中に自己の影を確認することによって、自己の全体性を保っているのである。

我々の社会が、理性によって平等社会をめざそうとすればするほど、現実には新たな差別が再生産されてしまうと、いうパラドックスの中に我々は投げ込まれている。差別の問題とは、いくら高らかに「人間平等」を唱えても、それが理念にとどまっている限りは、決して解決しないであろう。自分の、極日常的な、そして社会的な関係意識の中で、

さらには自己の内部の問題として差別を捉えていかなければならないのではないだろうか。そしてそれは、差別をうみだすシステムに組み込まれて生きている、あるいはそうしたシステムの中でしか生きられない我々の存在のあり方と対決することなのである。